



TITLE:

<批評・紹介>科擧 宮崎市定著

AUTHOR(S):

萩原, 淳平

CITATION:

萩原, 淳平. <批評・紹介>科擧 宮崎市定著. 東洋史研究 1947, 10(1): 61-63

ISSUE DATE:

1947-12-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145847>

RIGHT:

の天命觀の相違が何はれやうと思ふ。

若し古代史研究家を釋古派と疑古派に分類することが出来るならば、津田博士の立場は正に疑古派のそれであると云ひ得よう。而して本書は津田博士の立場としては一應完成したものと云へる。只、疑古派に免るべからざる特質として、破邪に急であつて、顯正に略である。要するに本書は、疑古派の長所を遺憾なく發揮しつつも結局その効力に一定の限界があることを如實に示したものに外ならぬであらう。

なほ本書を讀む初學者の爲に二三の參考書を附記して置くのも無駄ではあるまい。論語の本文を何で讀むかが先づ第一の問題であるが、單なる讀み下し文を國譯と稱するならば、寧ろ原の漢文で讀むに如かず、少し古いが根本通明博士に「論語譯義」があり面白く讀める。但しこれには専門家の側から異議が出るかも知れぬ。經典以外の孔子の言葉と稱するものを集めた本に清の曹庭棟の逸語があり、之も古いが、遼陽隆吉博士に「逸語訓譯」がある。孔子弟子の事迹は馬綱の經史卷九十五に、纏められ、俗書と題けられ乍ら、も薛應旂の「四書人物考」は便利である。なほ武内義雄博士が定本を造つて國譯された岩波文庫本論語及び津田博士とは別の立場から論語の成立を考證した「論語之研究」が必讀のものなるは云ふまでもなからう。

岩波書店發行、大正版、五三頁、外三三頁、價七十圓

(宮崎市定)

科

舉

宮崎市定著

A5版二八八頁 昭和二十一年十月二十日
秋田屋發行 定價 三 十 圓

科擧は中す迄も無く、中國に於て隋代より清朝晩年まで千三百有餘年間實施され來つた、高等官資格試験制度である。多少の變遷はあるとしても千三百年間繼續されたと言ふ此の事實に對しては、單に官吏登庸法と言ふ問題に止らず、更に直接間接影響を受けた種々の問題が、これに伴つて提起される。例へば近世獨裁君主制と科擧との關係、黨爭問題或は異民族の漢人統御策としての科擧制度等の如き政治史的意義、或は又中世貴族に對する所謂近世士大夫階級乃至讀書人階級としての社會史的意義、更には文學、史學、宗教、哲學等の文化史的、思想史的立場に於ける科擧のしめる地位等々、多々問題は含まれてゐる。従つて科擧こそ中國の官制のみならず、中國そのものを知らずしては、換言すれば、實は科擧を知らずしては、中國は語り得ないのである。しかるに從來一般國人が中國問題を論ずるに當つては、あまりに獨斷的であり、上すべりのであつて、かかる重大なる問題を包含せる科擧に對しても、ただ漠然とその存在を知るに過ぎぬ程で、今迄にその本質にふれた専門書らしい専門書が出されなかつた。この事は一見不思議に見えて、實は問題が餘りに重大である事に、その原因が存するのである。この今迄に當然發表さるべくして、發表されなかつた問題が、此

處に先生の手に世に出されるに至つた事は我々の最も喜びとする所である。

先生の數多い著作並びに研究論文は此處に紹介する迄も無い事であり、且又本書の批評紹介等は私如きには荷が重すぎるので、未だ本書に接しない人、又は今後東洋史を學ばれる人々の爲に本書の内容の概略を述べれば、先づ本書は、結論「科擧の沿革」、「清代に於ける科擧の制度」、「近世支那社會と科擧」、「科擧制度の崩壞」の四章から成る。「科擧の沿革」に於ては、官吏登庸法を漢代から始められてゐるが、所謂漢代の選舉、南北朝の九品中正制度と、後世の科擧との根本的差異は、他處と自薦とに存する。しからは後世の科擧は、その起源を何時に求むべきか。その萌芽は既に北朝齊に萌し、隋の開皇十八年中正制度の廢止の時にその起源を渡し、種々の變遷を経たる後宋代に至り、形式内容共に行くべき所にまで到達した。而して遼金元三朝は共に異民族出身王朝にして尙武立國の政體たるにも拘らず、科擧制度は踏襲され、明代に至つては學校制度をも包括する形體上尨大なものとなり、宋代に整備された科擧制度は更に複雑化され、莊重化されるに至つた。この傾向の最も著しく現れたのが清朝であつて「清代に於ける科擧の制度」に於て、先づ科擧の前提たる學校試の三段制が述べられ、その間、學校の組織と入學資格、縣試出願の手續、科擧の風習、生員の特權義務處罰、歲試及出貢に就いて項を分つて詳細に説明され、次に法制上純粹なる科擧制度に就いては、鄉試、會試、殿

試の三殺制と、これに附屬する諸試驗に關して微に入り、細を穿つた解説が施されて居る。此處に至つて、從來漠然と考へられて來た科擧なるものが、その組織内容に於て、如何に複雑を極めたものなるかをはつきり知り得ると共に、爲政者たる清朝當局者が科擧制度を如何に重視し、且つ又これに苦心を拂つたかを理解する事が出来る。續いて清朝獨自の宗室、八旗及び譯科擧は、清朝としても異民族支配と言ふ特別な立場に立つて、その對策にも自ら獨特の情みを有し、出來得る限りの研究と努力の現れではあつたが、その結果は望ましいものではなかつた。最後に方向を變へて科擧以外の所謂雜途出身の文武官の登用法を附け加へられ科擧と比較する事に依つて、一層科擧の性格を明瞭にせられて此の章を終つてゐる。

「近世支那社會と科擧」には三つの事が述べられてゐる。第一は社會階級と科擧との關係であり、社會階級的に見ると、たとへ科擧は行はれたが唐代の性格は、前漢末若しくは後漢に始まる血統門閥を重んずる貴族階級と、宋代より勃興した新興階級との相剋時代で、而も中世貴族は此の間、既に衰退し始め、五代の亂離と共に著しく其の勢力を減じた。これに代つた新興階級こそ、科擧出身の所謂士大夫階級であり讀書人階級である。彼等の中世貴族と異なる點は彼等は獨裁君主の忠實なる臣下であるを共に當時の最高の智識階級でもあつた。その出身も固く農工商からも求められるが、結局經濟的餘裕のある富裕階級に限られたので、中世貴族と異なり、近世士大夫も亦一

種の貴族であつた。即ち、近世末期の支那社會は、士大夫と庶民、治者と被治者、智識階級と無智識階級、地主と農民の二分分野に判然と區別された。第二は官僚生活と科擧の問題で、この中には科擧出身者の實際にしめる社會的地位と、科擧に伴ふ黨爭就中王安石を中心とする新法黨と、司馬光、呂公著等の舊法黨との黨爭、更に官界の氣風等が興味深く述べられてゐる。第三は、科擧と學問との關係が、相互に因果關係を持ちつゝ進歩發展したが、總じて科擧は廣義の學問を盛にし、一般知識の向上に貢獻した。しかしながらこの勢の赴く所、終には兩者分離するに至り、科擧準備の爲の學問は、純粹の學問に非ずして、單なる仕官の手段乃至は社交的意味での學問に墮してしまつた。

最後の「科擧制度の崩壊」に於ては、清末外國文明、特に西歐文明の侵透とその壓迫と、又一方に科擧制度そのものの内に含まれる缺陷の暴露に、次第に自己崩壊へと向つた。これに對する清朝最後の努力は、光緒末、學堂の獎勵と外國留學生派遣へと向けられたが、事志に反して、皮肉にも革命は彼等の手になり、清朝の滅亡と共に千三百年の歴史を有する科擧制度も崩壊した。此處で科擧制度を概観すれば、儒教特に朱子以來の儒教は宗教と見られるのであつて、科擧こそ儒教僧侶の得度の爲の學術試験であり、總じて中國は政教一致の代表的法皇國であるが、中國皇帝及び科擧制度の性格は宗教的と言ふより餘りに政治的色彩が濃厚であつたので、科擧の崩壊こそ、とりもなほさ

ず法皇的皇帝政治の終焉であり、政教分離の國となつた事を意味する。終りに結論的な意味で科擧の功罪に關して論及せられてゐる。

以上が本書の内容の概略であるが、概論なるが故に、漢文の引用は殆んど無く、平明に書かれてあり、一讀して科擧とは如何なるものかをはずきり知り得る。かかる重大なる問題が、かくも平易に說かれて、世に出されるに至つた事は、我が學界の最も喜びとする所であり、少くとも中國に國心を有する者の必讀の書と言ふも決して過言ではない。尙、「清代に於ける科擧の制度」中には、二十數葉の寫眞版が入れられてあり、詳細を極めた解説と共に清朝の科擧制度が眼前に、ほうふつするの觀がある。又第三章第四章中には種々のしさに富む問題が含まれて居り、我々後學者の學ぶ所多きを感じる。

最後に、跋にも書かれてある如く、此の書は、戰時中、召集直前書かれたもので、先生が遺稿となる事を覺悟せられた書であり、而も原稿は大阪大爆發中奇蹟的に秋田屋の倉庫の中へ、助かつたもので、先生御自身にとつては勿論、我々後學者にとつても、因縁淺からぬものある事を思ふ時、この書が今この世に出された事に對して、一層意義深きを感じるのである。尙淺學非才の身を以ては、本書の眞價を傳へ得なかつた點が種々有り、此處に先生の御覽恕を請ふ次第である。(萩原淳平)